

『正法眼蔵』における『妙法蓮華経』

米野 大雄

序論

当該論文では、日本曹洞宗の宗祖とされる道元（一一〇〇～一二五三）の代表的著作『正法眼蔵』を採り上げ、特に『正法眼蔵』の中で、『妙法蓮華経』を引用する幾つかの巻についての考察が中心となっている。序論では、まず『正法眼蔵』を取り巻く問題について扱った。そこで紹介したものは、七十五巻本と十二巻本において、どちらが道元の真意を表しているか、すなわち、どちらが真の『正法眼蔵』であるか、また、真に道元によつて意図された『正法眼蔵』とは何かについての論争である。当該論文では、原則、七十五巻本と十二巻本については、同等に扱った。

続いて、道元の思想背景についての先行研究に触れた。まず採り上げたものは、道元の思想遍歴の有無に関する議論である。特に、思想遍歴を主張する立場の中に、『法華経』が思想の転換を担う役割を果たす論述がある。また、本覚法門と禅思想が似ているところがありつつ、道元の思想が完全に中国禅思想の上に位置付けることはできないことや、天台学の思想的影響といった指摘が存する。本論文では、その検討の中で、様々な『正法眼蔵』に関する現代語訳や註釈書を参考に行っている。とりわけ水野弥穂子氏訳『道元禪師全集・原文対照語訳』全七巻と神保如天、安藤文英『正法眼蔵註解全書』全十巻⁽²⁾によつた。また、『正法眼蔵』本文については、一

貫した底本を使用していることから、河村孝道校註『道元禪師全集』第一巻と第二巻⁽³⁾を使用した。

第一章 「阿羅漢」巻について

二乗作仏に関する「阿羅漢」巻の内容について検討を加えた。検討によれば、冒頭に引用される『法華経』「序品」の「諸漏已尽、無復煩惱、逮得已利、尽諸有結、心得自在」⁽⁴⁾について、道元により独自の解釈が施され、末尾の道元の偈頌はその言い換えといえる。そして、その経典解釈については、鏡島元隆氏の論を出ないことがいえる。加えて、「阿羅漢」巻における論の展開では「圓語録」によるところが大きい。

更に、「阿羅漢」巻における二乗作仏論について、「阿羅漢」巻は、利他についてほとんど説くことがない『正法眼蔵』において、利他を担う役割を持つことも考察した。そして、その役割には、論の展開に重用される「圓語録」ではなく、『法華経』が大きな任を担っている。しかも、その役割は、『法華経』の利他的な内容を述べる文を引用すること、すなわち、『法華経』の意味内容ではなく、二乗作仏を説く『法華経』という、『法華経』自体が一乗を宣揚する経典としての標示内容が果たす働きである。

第二章 「諸法実相」巻について

本章は「諸法実相」巻についての考察である。まず、『法華経』方便品の十如是对する道元の定義についてみていくと、道元は、諸法実相という語の解釈について、諸法は実相であると内容的には言えるにも拘わらず、諸法は実相であると断言しない。道元の諸法実相の定義では仏祖を媒介として諸法と実相が結び付けられる。

次に、道元の諸法実相観に関する先行研究を紹介し、その是非を検討した。先行研究で証文とされる『正法眼蔵』諸巻も併せて検討することで、諸法と実相は仏を媒介として構成される概念であることが確認できる。また、諸法実相と現成公案について比較検討する必要性が生じるほど、両概念の先行研究における定義は酷似している。しかし、現成公案は『正法眼蔵』を貫く概念であるため、現成公案について本論文では深く立ち入ることを避けた。また、論を進める中で、先行研究で首肯できる諸法実相論は、天台学で論じられる諸法実相論と似通っていたため、道元の諸法実相論の特徴を論ずる中で、その特徴を限定的に論ずる必要性が見出され、本章の後半で検討している。加えて、『正法眼蔵』の諸法や実相に関する諸巻についても分析を行っている。特に「十方」巻の内容を検討した結果、十方とは仏・自己を起点とした、測度の及ばない無尽の世界といえる。更に、「山水経」巻や「有時」巻、「十方」巻の記述のように、諸法や実相は『正法眼蔵』を通して説かれていることから、わざわざ「諸法実相」を題した巻を撰述した意図を探ることも、本章の問題とするところである。

続いて、「諸法実相」巻における方便品の十如是に関する文を定義した後の論の展開について整理した。ここでは、禪宗の特徴とされる教外別伝に対して批判的な姿勢を採っている。加えて、末尾の定義を冒頭に展開された論と合わせて解釈すると、実相から定義づけられ、次で諸法が定義されていることから、道元にとって諸法実相は実相から定義することによって、諸法につながる概念と言い得る。

更に、引用形式について着目した。「諸法実相」巻は『法華経』の文章を承けて論が進められるため、禪籍以外で引用されるものは『法華経』のみであることが分かる。加えて、引用される禪籍は雪峰義存(八二二〜九〇八)によるものを除いて、三教一致説への批判や、実相を参究する必要性の強調、天童如浄(一一六三〜一二二八)の称揚、如浄以外の道元在宋

時の禪者への批判、青原門下の称揚であり、雪峰義存による引用も『法華経』「法師品」からの引用文中の門という語について説明するために引用されている。従って、「諸法実相」巻における諸法実相の定義は『法華経』に一任していると判断できる。更に、諸法は実相であると断言しない理由について、仏を起点に諸法は実相といえることから、単純に諸法が実相であると述べて、目の前の諸法を全肯定することは避けたかったからという理由が推察される。また、諸法をあくまで実相の標示とみなすと結論し、これは、単純な宋朝禪や日本達磨宗に対する靈性批判とは別の、いわゆる禪的なあるがままの全肯定を避ける態度である。

そして、次に、天台学における諸法実相論について、石津照靈氏の著作⁶⁾を参考に検討し、道元の諸法実相論の特徴を限定的に定義する必要性を提起した。検討の中で、道元の經典観を分析する必要性が導かれる。更に、道元は基本的に理として天台の実相論を承けながら、修行を無意味化することに繋がる部分は承けていないことから、この修行の無意味化を避けるため、諸法が実相であるとの断言を避けたであろうことが看取される。また、諸法の定義は、十如是を森羅万象の諸法と並置することによって、諸法を参究する際の、理の側面を弱める意図があったことが指摘でき、「山水経」巻の説示から、諸法を諸法のまま参究しつつ、参究した後、しよほうとして、諸法と異なつて諸法を見ることが導かれ、そこに、十如是のような分析を不要とした理由も見出せる。加えて、道元において、諸法が実相であることではなく、諸法が実相であると参究することが重要である。従って、天台学でも『正法眼蔵』でも諸法実相が心と結びついため、心の捉え方、心による世界観がどのようであるかについての検討の必要性が新たに提起される。しかし、本論文では結果として、その必要性を指摘するのみに終わった点もある。

第三章 『妙法蓮華經』を引用する諸巻について

「見仏」巻、「如来全身」巻、「観音」巻、「夢中説夢」巻について考察を加えた。「見仏」巻では、信解や修行の必要性を称揚しつつ、經典の価値も称揚する働きを『法華經』が果たしている。加えて、『法華經』は「見仏」巻において、作仏の具体的内容と必要性を説明するために用いられている。続いて、「如来全身」巻について分析を試みている。「如来全身」巻では冒頭で『法華經』法師品を引用し、それに基づいて展開している。加えて、この法師品の引用を含め、經典が三か所に引用され、その全てが『法華經』であり、形式だけみれば、『如来全身』巻は『法華經』によって構成され、論述がなされている。更に、「法師品」の引用を解釈する中、実相を中心に論述が組み立てられる箇所があるが、実相が如来全身であると内容的にはいえるにも拘わらず、実相が如来全身であると断言しないことから、「諸法実相」巻と同じく、無条件の全肯定を避けた意図がみえる。また、「夢中説夢」巻やいわゆる「発無上心」巻である七十五巻本「発菩提心」巻との説示年代から、「諸法実相」巻を撰述した意図にも関係して論じ得る。加えて、「観音」巻と「夢中説夢」巻についても少しく考察を加えている。「夢中説夢」巻への分析は先行研究の域を出ないが、「観音」巻の説示は、その説示内容のみから判断すると、先行研究の推論を首肯することはできない。

結語

以上の三章を通じて、『正法眼蔵』における『妙法蓮華經』について、道元は『法華經』に依拠して論を展開しているところが大きいことを論じている。『法華經』の基本的な註釈書である『法華玄義』などから、理論

的に、天台よることがいえる。また、『法華經』自体に価値を認めることで、『法華經』を引用すること自体に価値を認める立場が見出される。また、第二章で論じた「諸法実相」巻の記述が特に天台と関わるものが判明した。その中で、心に対する考察を進める必要が課題となる。『正法眼蔵』において論じられる内容を全て道元の思想的円熟の発露とみなし、道元の思想的特徴として称揚することは、道元を仏教一般の伝統から切り離すことに繋がる。釈尊からの仏法を受け継いだ自覚を持つ道元の思想を仏教の伝統の中に位置付けることが必要である。

注

- (1) 春秋社、二〇〇二年～二〇〇七年。
- (2) 無我山房、一九一三年～一九一四年。
- (3) 春秋社、一九九一年～一九九三年。
- (4) 道全一・四〇三頁。
- (5) 「道元禪師の引用經典・語録の形式的・内容的考察」(『道元禪師の引用經典・語録の研究』二章、木耳社、一九六五年)。
- (6) 「天台実相論の研究―存在の極相を求めて」(弘文堂書房、一九四七年)。

道範の成仏思想研究

佐伯公宣

鎌倉時代初期に活躍した東密の学匠である正智院道範（一一七八？—一二五二）は、華王院覚海（一一四二—一二三三）と禪林寺静遍（一一六六—一二二四）という二師の教学を相承した人物である。道範の教学で有名なものは、やはり静遍より相承した三点説の教主義であろう。三点説とは、仏身を理・智・事の三点に分け、理と智が和合している事点の仏身が説法するという説である。これまでの道範に関する研究はこの三点説についての論考が中心であった。しかし、道範は東密において早い段階で初地即極説を採用していた人物でもある。そして、本有家という、衆生が本来有している仏性を重視する学匠の一人にも数えられている。この本有思想も道範の成仏思想の特徴の一つであると考えられる。その教学は後に宝門を大成した宥快と並び称される長覚に引き継がれ、寿門教学の基礎となる。したがって、道範の成仏思想を研究することは、空海以降の東密において、どのように成仏論が形成されていったかを明らかにするうえでも重要であるといえる。本修士論文は、道範の成仏思想を考察し、その特徴を明らかにするとともに、三点説と成仏論との関係についても論じ、その成仏思想の一端を解明せんとしたものである。

第一章 道範の成仏論

本章では、主に道範の成仏論における「自証・化他」の区分について検討した。それにあたっては、道範の『即身成仏義問書』における、「十六生成仏」の解釈に注目した。この十六生成仏をめぐる問題は、空海撰とされる『即身成仏義』が、即身成仏の証文として、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の「十六生成仏」の記述を引用しているところに端を発する。つまり、十六生を経て成仏するのであれば、即身成仏とは言えないのではないかという疑問が出てくるのである。この記述について、空海の『即身成仏義』では詳細な解説はなされていない。従って、この記述の解釈は後世の学匠に委ねられることとなった。

道範の「十六生成仏」についての解釈は、まず「自証・化他」の区分を用い、それを「本有・修生」に配当するところにその特徴があるといえる。つまり、衆生が本来備えている仏性であるところの本有（本覚）を自証の位に据えて、それ以降の修生を他の機根にその自証の内容を示すこと（化他）であるとするのである。このように、自証と化他を本有と修生に当てはめ、本覚の仏性を開顕するための始覚を化他とすることによって衆生の身体のままでの本来的な成仏が示唆されているのである。

次に東密の論義の算題として、「成仏二利」というものがある。これは、『大日経』の具名である、『大毘盧遮那成仏神变加持经』の中の「成仏」の語に、「自証」と「化他」の二つの意義が含まれているか否かを論ずる算題である。道範の著作において、この問題が論じられている箇所を検討すると、まず、覚海の教学を受けて著されたとされる、『大日経疏除暗鈔』（以下、『除暗鈔』）では、「成仏」の語は自証の意義に限るという結論が出されているのに対し、静遍の教学も含めて著されたとされる『大毘盧遮那成仏経疏遍明鈔』（以下、『遍明鈔』）では、この「成仏」の語に自証と化

他の両義が含まれていると明記されているのである。『遍明鈔』におけるこのような態度は、『即身成仏義聞書』において、十六生を自証と化他によつて理解していた方法と軌を一にするものであると考えられる。このことから、静遍の教説を受けたことによつて、道範の成仏論の中で、化他の義が重視されるようになったということがわかるのである。

第二章 道範の三点説

本章では、道範の特徴的な思想の一つである三点説の教主義について、先行研究を概観した上で、成仏論への展開を見出し、先に確認した、成仏における「自証・化他」の区分との関連性を指摘した。

まず、三点説についての先行研究をまとめると、以下のようなになる。真言宗では古来、『大日経』の教主についての議論が活発になされてきた。それは教主である大日如来がいかなる仏身であるのかといった議論である。道範の師である静遍は、このような教主義についての議論の中で、三点説を提唱した。三点とは、「理・智・事」の三点であり、この三点をそれぞれ「自性身・自受用身・他受用身」に配当する。そして、理智が和合しているところの他受用身が教主であるとするのである。

静遍から三点説を相承した道範は、事点の他受用身とは自性身上の他受用身であり、あくまで説法の主体は自性身であるとする。これは、法身説法を標榜する東密古義派の伝統と、三点説との会通を計つたものと思われるが、いずれにしても、事点である他受用身的な仏身を教主とするのである。

従来の先行研究では、主に教主義としての三点説についての考察が進められてきた。しかし、道範の三点説には、教主義に限定されない側面がある。それが顕著に見られるのが、『即身成仏義聞書』巻下の記述である。

この部分では、三点説を異本『即身成仏義』に見出される、理具・加持・顕得の即身成仏にそれぞれ配当する解釈が示される。道範は、理具・加持・顕得の三種即身成仏をそれぞれ理・智・事に配当し、事点で顕得する仏身を他受用身であると解釈する。そして、他受用身である、事点の顕得成仏を説明するにあたっては、「自証・化他」の義を用いている。ここにおいて、三点説と、前章で確認した、成仏における「自証・化他」の義との密接な関係が見出されるのである。つまり、三種即身成仏の中の、顕得成仏において獲得する仏身を、事点である他受用身とすることで、成仏にも他受用身的な性格が付属することになる。それが、他の衆生を導くという化他の働きである。これらのことから、道範が成仏論を説くにあたって、「自証・化他」の義を重んじていたことには、この三点説が少なからず影響を与えていたと考えられるのである。その意味で、道範の三点説が教主義のみならず、成仏論としても検討されるべき思想であるということがいえるのではなからうか。

第三章 「即事而真」をめぐる

本章では、道範の成仏思想を考察するにあたって重要であると思われる、即事而真という考え方について検討した。即事而真とは、事に即して真とすることであり、この現象世界がそのまま真理の世界であるとする考え方である。道範の『大日経疏』の註釈書である『除暗鈔』と『遍明鈔』では、この「即事而真」という言葉について、「遍計所執不捨」と「四相常住」という二つの側面からの解釈が試みられている。

まず、『除暗鈔』にみられる、「遍計所執不捨」の義について検討すると、その言葉の通り、妄見である遍計所執を捨てずに成仏することができるという考え方である。この義は道範の複数の著作の中に見られるものである。

が、とりわけ注目したいのは、『即身成仏義聞書』にみられる、円珍や安然といった台密の学匠を意識した記述である。ここでは、円珍や安然の著作の中で、「煩惱即菩提」が説かれている部分を引き合いに出し、円珍や安然の教義が、遍計所執を捨てる立場であることが指摘される。そして、そんな遍計所執を捨てずに成仏が可能である東密の優位性を主張するのである。このことから遍計所執不捨の義は、円珍や安然の教学に対抗する形で成立した教義である可能性も考えられるのではなからうか。いずれにしても、道範はこの「遍計所執不捨」の義において、頓証の成じやすさというものを重視し、その点において、円珍や安然といった台密の学匠の教義を意識していたということがわかるのである。

また、『遍明鈔』にみられた「四相常住」の義も、「遍計所執不捨」の義と同様にあらゆるものを仏徳の現れであると見做す考え方であった。四相とは、生・住・異・滅の四相であり、通常はこの世界のあらゆるものが無常である様を説明する際に用いられる言葉である。道範の著作では、この四相がそれぞれ常住であると考えることによつて、即事而真が他宗にはない真言宗独自の思想であるということを主張しているのである。つまり、目の前のあらゆるものを真理の世界に包摂させて考える、天台や華嚴の教学に対して、真言宗の優位性を示すために、唱えられた説であるといえるのである。このような目的意識は、先に検討した遍計所執不捨の義と同様のものであると考えられる。ここからも、道範が他宗の教学との競合のなかで、より一層この現象世界を肯定していく方向に向かつていったということがわかるであろう。そして、この「遍計所執不捨」と「四相常住」の両義は、後世に受け継がれ、論義の算題として結実する。それだけこの問題が東密の教義において重要な課題であったことが窺われる。このことから、空海以降の東密の成仏思想に、他宗、特に台密の教学が深く関わっているということを改めて指摘して、結びに替えた。